

# 大学入学直後の日本語パートナー活動を通じた留学生の自信獲得プロセス研究 —修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析—

堀内 みね子

## 1. 背景と目的

大学に在籍する外国人留学生（以下留学生と略す）支援の方向性を考えるとき、一般学生への支援と同様に教務的な側面と教育的な側面からのアプローチが存在する。しかし留学生は一般学生とは違う特質を持っている学生たちでもある。異なる言語、文化背景を持ち、日本に留学する以前に持っていた社会的支援から切り離された環境で生活していることを理解しなければならない。つまり先の教務的、教育的側面からのサポートに加えて、家族や友人などの社会的支援の一時的な喪失が補えるような新しいソーシャル・サポート構築へのアプローチが必要と考えられる。

本学では学部への留学生受け入れを開始して 4 年目を迎えたばかりだが、留学生支援体制の制度化へ向け試行錯誤を続けてきている。大学学部内に在籍する外国人留学生（以下留学生と略す）は 96 名（2004 年度）で留学生別科生を含めると 200 名を超え、授業内外でも受け入れ学生との多文化接触、協働学習作業の機会は日常的になりつつある。学生自身、自分とは異なる文化背景を持つ学生に対する潜在的な興味と関心を強く抱いている。特別なイベントを催して交流活動をするのではなく、このような日常的な学生生活そのものが既に様々な文化との交流の機会であり、キャンパスでの日常的な多文化交流の体験が重要な意味を持ち（坪井 1999、67 頁）、しかも充実したソーシャルサポートネットワークの形成が適応を促進する。そのネットワークにホストを排した場合は適応価が希薄になる（田中 2000、175 頁）ことも指摘されている。

このような学生のニーズと外国語大学という環境資源をより活用するために、学部留学生受け入れ当初から留学生支援制度構築に向け一般学生の積極的な参加を呼びかける活動を提供してきたが、そのひとつに日本語パートナー活動（以下 P 活動と略す）がある。この制度は国立大学のチューター制度<sup>1</sup>をモデルとしているが、現在では留学生を受け入れている多くの機関が各機関の実情やニーズに応じてチューター制度を実施し、様々な角度からの研究も行われてきている。チューター自身あるいは留学生にとってのチューターを視点とする調査研究がすでに 1980 年代前半には行われていて、日本人がより積極的に参加できるのは「情緒的サポート」、「話し相手としてのサポート」の提供者として、留学生のサポート・ネットワークに参入できる可能性が大きい（高井 1994、115 頁）ことが指摘されていたにもかかわらず、この制度は必ずしも順調ではなかった（村田 1999、121 頁）。また、留学生との日常的なかかわりの中で援助する機能を備えている同国人や日本人学生を含む

---

<sup>1</sup> 昭和 47 年度に国立大学において国費留学生を対象に始まり、昭和 51 年度からは私費留学生にもその適用範囲が拡大され、新渡日留学生の生活・学習の補佐役を指導教官の指導の下に受け入れ学生が担う制度（村田 1999、120 頁）である。

ボランティアヘルパーからの援助、とりわけ受け入れ学生とのネットワーク構築が入学後の大学生活をよりスムーズに開始する大切な要因となる（水野 2003、51 頁）ともいわれているが、パートナーとの友人関係を形成するプロセス自体に焦点を当て、その変化の過程を明らかにすることで対人関係の質を高めるための示唆を得られるような研究は多いとはいえない。

本研究の目的は、新入留学生が大学生活という新しい環境に足を踏み入れ、留学生に提供された支援制度のひとつの活動である P 活動体験を通して、パートナーとの友人関係形成により、自信を持って学生生活がスタートできるようになった留学生の体験過程を明らかにし、そこから得た知見をチューター活動や P 活動のより効果的な実施に役立てることである。その手法として、変化の過程を分析するのに適しているといわれるグラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下 GTA 法)を用いた。

## 2. 分析方法

### 2. 1 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

面接のデータ分析は、アメリカの社会学者グレーザーとストラウス（Glaser & Strauss 1967）によって 1960 年代に考案され、変化の過程を分析するのに適しているといわれるアプローチを用いた。この方法はデータに密着（grounded）した分析から独自の理論を生成し、概念とその諸概念を関係付けるカテゴリーによって一連の現象を説明する質的研究法として、医療・介護・福祉などヒューマン・サービス領域で近年注目されている。本研究の分析には、実務者がより研究しやすいように新たな提案をしている修正版 M-GTA 法（木下 1999；木下 2003）を用いた。この分析方法を用いた理由として次の 2 点を挙げる。まず、人間と人間との具体的やりとりである社会的相互作用にかかわる現象の研究に適している（木下 1999、81 頁、131 頁、241 頁）ことから、学生同士の相互作用に焦点を当てた分析に相当であると考えたこと、次に研究結果の実践的な活用が試みやすく、留学生支援活動の実践に適していると考えたことである。

分析上の重要要点は、①理論生成より grounded on data が優位であること、②生データよりも生成した概念が優位であること、③分析結果であるグラウンデッド・セオリーは、生成した概念とその関係であるカテゴリー、そして例示した部分のみによって表現すること（木下 2001、52 頁）があげられる。データの解釈に当たり、焦点を置く特定の人間を分析焦点者として設定するが、これは創り出す概念が大体一定の水準になりやすく、研究結果をほかの人が理解しやすいため（木下前掲、55 頁）に行うものである。

### 2. 2 分析手順

面接内容は、対象者の許可を得て録音し文字化を行った。その後データ全体に目を通したあと、数行ずつ関連のある部分に着目し、データの意味を表現する概念名をつけた。次に、概念の意味のまとまりに基づいてカテゴリー化し、カテゴリー間の関係について明らかにした。概念ができた段階で具体例、定義、概念名をワークシートに記入した。このワークシートの作成が修正版の特徴であるが、ここにはデータの解釈をする際に考えたこと、思い浮かんだことや疑問、対極例などを理論メモ欄に記入した。類似例と対極例を確かめる対極比較を行うことは、解釈の恣意性を防ぐためにも重要とされる。同時に生成した概

念と過程全体を考えながら、概念をカテゴリーにまとめる収束化の作業を行う。

以下に本論文におけるひとつの概念生成過程を例示する。

「迷ったが、学校の制度だし、留学生に役立つように考えてやっていることだし。(略) 日本語の使い方も不自由だし、日本人の友達ができて自分の意図が伝わらず知らずに相手を傷つけたり、誤解されたりしたらどうしようと迷った」という部分から、筆者は<制度としての P 活動>という概念を生成した。そしてこの概念の定義を「入学直後に、自分の意志にかかわらず知らない先輩学生を紹介され強制的な活動だと感じるが、仕方なく、あるいは不安や心配を抱えて活動に参加した」とした。こうした分析をしていく中で浮かんできたアイデアをメモとして理論的メモに書き留めた。たとえばこの概念では「はじめ活動に対して、自主的で積極的な姿勢は弱い。むしろ不安や心配のほうが大きい」とメモした。このようにデータのある箇所に注目し、その意味の理解から類似例の比較を他のデータに対して行い、その結果により概念を精緻化していくのが修正版の基本的な流れである。さらに概念としての完成度を上げるために、類似例のチェックと並行して対極比較でのデータチェックを行った。例えば先の例のような学生ばかりではなく「パートナーを紹介してくれると聞いて喜びました」と日本語の会話練習が必要と感じている学生は、制度への抵抗感は抱かず、むしろ自分にとっては必要な活動として好意的に捉えている。このような場合は対極例として扱った。あるいはまた、そのような例が見られなかった場合は、その旨を理論的メモに記録した。

### 3. データ収集

#### 3. 1 P 活動概要

学部に入學した留学生が、入學と同時に留学生担当者から日本語パートナーと呼ばれる受け入れ側の先輩学生（以下パートナー学生と略す）を紹介される。この活動はパートナー学生と前期約 2 ヶ月間にわたり 1 対 1 で友人関係を築きながら、新しい学習環境への適応をよりスムーズに開始できるようにという目的を持っている。入學直後の前期に選択及び必修の日本語科目を履修する留学生の場合は授業の一部として評価されるため、学生にとっては参加しなければならない活動として位置づけられている。1 年目後期以降は、希望者を対象にした活動となる。

本調査の対象学期は、留学生の大学への入學手続きが決定した時点で、あらかじめ募集しておいた P 活動希望学生とのマッチング作業を行った。1 対 1 の組み合わせが決定後、ペアになった両学生に互いのメールアドレスを担当者から連絡し、入學式までの約半月間をメールを介して相互に連絡を取りあうところから P 活動を開始した。パートナーになる学生には希望者を募る際に、活動内容、目的、心がけることを説明し、留学生にも入學後に同じ内容を説明した。その詳細は表 1 の通りである。

#### 3. 2 面接

<対象者> 2004 年度新入留学生（28 名）のうち、パートナーとの関係形成ができたと思われる留学生に研究の趣旨を伝えた上で、協力を得られた留学生 9 名（表 2）を対象とした。

- <方 法> 各面接対象者との個人面接で、時間は一人につき 40 分から 60 分間実施した。  
「活動内容はどのようなものだったか」、「活動体験を通して感じたこと、気づいたこと、学んだこと、役立ったこと」について非構成的な面接形式で自由に話してもらった。
- <時 期> P 活動と学生生活全体の関係や、その後の学生生活などをふりかえる時間を置いてから体験について話してもらうため、活動終了約半年後に実施した。

表 1：日本語パートナー活動について（学生への説明用）

時期	2004 年 1 月	3 月中旬～入学前	4 月～7 月(P 活動期間)
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>ML で募集開始</li> <li>参加者説明会と受付</li> <li>① 1/19</li> <li>② 1/26（詳細説明と事例勉強会）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>マッチング</li> <li>パートナー決定</li> <li>メール友達期間</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>履修相談</li> <li>中間報告書</li> <li>活動（定期的に会って対話を深める）</li> <li>P 会議（2 回参加）</li> <li>終了時アンケート</li> </ul>
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>学部に入學した新留學生が、新しい大學生活に一日も早く慣れて、安心して學生生活をスタートできるようになるために、先輩受け入れ學生が身近なところで助言や、対話をしながら留學生と 1 対 1 で友人関係を形成することで新生活を応援する活動。</li> </ul>		
活動計画	<ul style="list-style-type: none"> <li>互いに相談のうえ連絡方法、活動場所（定期的に会う場所）活動内容などはきめること</li> </ul>		
互いに心がけること	<ul style="list-style-type: none"> <li>相互理解が難しい、連絡がなかなかうまく取れない、相互の都合がうまく合わないなど、困難が生じた場合はまず相互に努力をしたり、互いの友人とも相談してみることに。</li> <li>解決策が見いだせない場合は、いつでも担当者に連絡し、応援を求めること。</li> <li>約束日時に都合で会えない場合は、必ず連絡すること。</li> <li>教師ではないので無理に教えようと頑張らないこと。</li> <li>相手や相手文化を理解する努力をすること。</li> <li>自分のできることを、できないことを明確に相手に伝えること。</li> <li>相手をはじめから特別視しないこと。</li> <li>対話を通して理解を深めるようにすること。</li> <li>自分ひとりで勝手に考えて判断してしまわないこと。</li> <li>率直に考えや気持ちを相手に伝える努力をすること。</li> <li>興味や関心を持って積極的にかかわろうという気持ちを持つこと。</li> </ul>		

### 3. 3 データ

修正版 GTA では、面接データだけではなく、観察データも重要と考えられているが、P 活動の観察は現実に実施することは無理であった。そのために実施後に提出を依頼したアンケート用紙<sup>1</sup>を必要に応じて参考にした。

- ①留學生対象アンケート用紙； a. P 活動終了時 b. P 活動中間時  
②留學生の体験作文； P 活動終了時に提出した体験感想文

<sup>1</sup> アンケート用紙 a. は、本報告書第 IV 部実施報告の拙稿資料を参照されたい。

本論の4. 分析結果と考察にあげたデータの例示は、なるべくそのままの表現を使用した。留学生の日本語表現がわかりにくい部分は、本人の表現意図を変えないように筆者が{ }内に多少の補足説明を加えた部分もある。

表2：面接者（留学生）一覧

留 学 生					P 活 動	パートナー学生
	入学時 滞日期間	性別	出身	P 活動以前の日本人との 友人経験歴	回数・場所 (各回時間)	学科学年 / 支 援活動経験
1	1年	M	中国	アルバイト先の間関係のみ	10回・空教室 (50分)	英米語4
2	3年	M	中国	アルバイト先での友好的な人間関係が多い。大学入学以前にも仲間と旅行経験あり。	6回・空教室 (30分)	英米語4
3	2年	M	中国	入学前日本語学習期間のチューター制度で友好的な経験有	10回・空教室 (45分)	英米語4 / P 活動3回目他支援活動参加多数
4	2年	F	中国	アルバイト先の間関係のみ	5回・学食 / 留学生寮 (90分)	中国語3
5	2年	F	中国	アルバイト先の間関係のみ	20回・学食 (60分)	スペイン語3
6	2年	F	中国	入学前日本語学習期間にチューター制度経験は有るが、あまり活発に活動していない	13回・学食 / 留学生ラウンジ (120分)	英米語4 / 有
7	2年	F	中国	アルバイト先の間関係のみ	15回・空教室 (60分)	中国語3
8	3.5年	M	中国	アルバイト先での関係と日本語母語話者の知人はいるが、日本語使用の機会は少ない。	10回・留学生ラウンジ (60分)	英米語3
9	1年	F	韓国	同性の友人経験なし	7回・空教室 (50分)	韓国語2

#### 4. 分析結果と考察

修正版 GTA は、質的データの解釈が中心になるため、以下、結果と考察をまとめて記述していく。

「大学入学直後の留学生が、支援制度の P 活動を通じた自信獲得プロセス」には、カテゴリー I < P 活動で出会ったパートナーが『普通の友達』へと変化する関係形成過程>と、それを構成する概念として、①制度としての P 活動、②定期的な P 活動が活動前の心配を払拭し、関係を深める、という二つを概念化した。また先のカテゴリー I を支え、促進する存在としてのカテゴリー II < 普通の友達への意識変化を支える過程>には、③会うのが楽しみになり、前向きの気持ちが増える、④パートナーとの普通の友達づきあいで自分の構えが少なくなり、素直な自分が出せるようになる、⑤お互い様にできることをする、の3つを概念化した。その結果、カテゴリー III < 異文化適応促進>に進むが、そのなかに、⑥留学生生活全般に対してより積極性が増し、自信が湧き、心が開いてくる、という概念の

存在が見出された。この異文化適応過程が促進すると、よりいっそうの適応促進が考えられるが、今回の分析は概念⑥までの過程を対象とした。

これら3つのカテゴリーとその関係を次頁の図に示した。以下にまずその概要を述べ、その後カテゴリーごとに説明する。各カテゴリーは〈 〉、概念は①～⑥までを下線付きで示し、例示部分は「 」で示したが、留学生の発話は理解できる限りそのまま使用した。

#### 4. 1 概要説明

まず、留学生は大学に入学直後、支援制度のP活動に参加し、1対1でパートナー学生を紹介される。この活動は入学直後の留学生にとっては、参加しなければならない活動として位置づけられている。留学生は『今日からこの先輩があなたの日本語パートナーです。この人と友人関係が形成できるように定期的に活動してください』と入学後に初対面の先輩学生と知り合いになる。それ以前にはほとんどの留学生が、日本人と親しく付き合った経験がないことが多い(表2参照)。そのため、この活動初期にはP活動のパートナーとして知り合った一人の先輩学生が、留学生の意識のなかで普通の友達としての存在に変化する過程は重要であると考え、〈P活動で出会ったパートナーが普通の友達へと変化する関係形成過程〉とカテゴリー化した。入学直後は新しい環境に慣れ、履修計画を立てながら授業への参加を同時進行していく必要があり、そんな時パートナー学生の存在やアドバイスが、全ての新入留学生にとって役立つであろうと考えられる。留学生もパートナー学生自身も、授業以外にアルバイト、部活、就職活動などで忙しい中で、この活動を継続していくことは双方の努力が必要となり重要でもあるので、カテゴリーIを支えるもう一つのカテゴリーIIとして、〈普通の友達への意識変化を支える過程〉とした。これら二つのカテゴリーにより、留学生自身が入学初期に抱えていた心配、不安などを克服し、自信を持って大学生生活の一步を踏み出せる気持ちが強くなる〈異文化適応促進〉を、三つめのカテゴリーIIIにおいた。

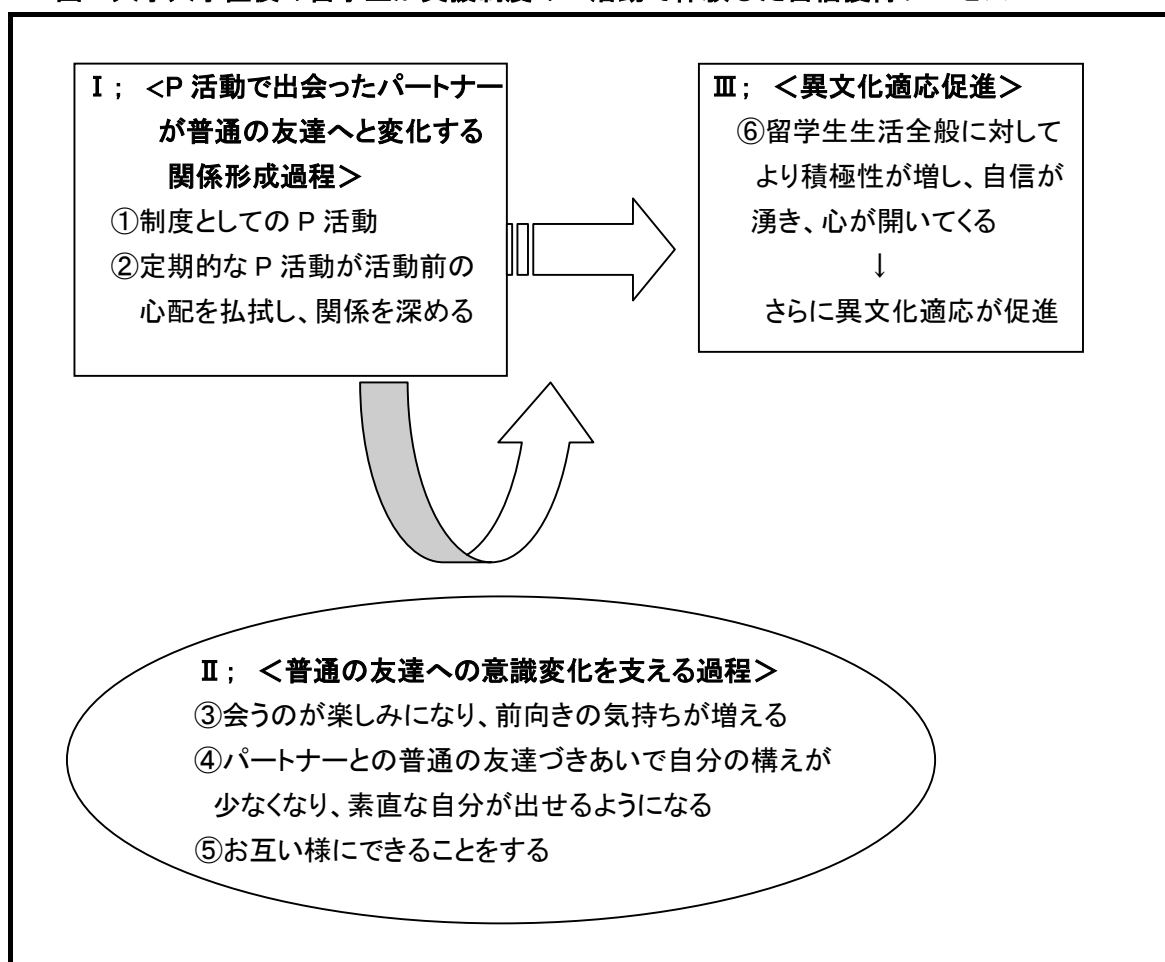
#### 4. 2. カテゴリーI ; 〈P活動で出会ったパートナーが普通の友達へと変化する関係形成過程〉

P活動開始時に留学生はP活動が決められた活動で、入学直後自分の意思にかかわらず初対面の先輩学生を紹介され強制的な活動だと感じている。しかし、決められた活動なので仕方がなく、或いは不安や心配を抱えて活動に参加しているので、これを、①制度としてのP活動と概念化した。「はじめは義務的なものと思って」、「1週間に一回会いなさいよといわれて」、「学校の制度だし、留学生に役立つようにやっていることだし」と感じたという。現実的には知人、友人もなく、大学の授業制度、大学外の環境にも不慣れという状況はあるが、留学生は既に日本で最低でも1年間ほどの生活を経験した後に大学に入学してくる。入学前はほとんどが日本語学校で学び、日本語能力試験の1級合格あるいは同等の日本語力を持ち入学試験に合格しているので「パートナーがいなくても何とかしたと思う」という学生のように自力でも学生生活を始められる状況ではある。「ま、でもせっかくだから、いいか」と始めた学生もいる。

しかし、先にも述べたように日本人との友人関係は乏しく、入学以前の滞日生活で日本

人と1対1で親しくつきあった経験を持つ学生は一人だけで、そのほかの2名は日本語学習期間にチューター活動を体験しているが、そのうち一人は日本語力や日本での経験不足のためにあまり活発に活動してはいない。つまり、日本人との1対1の付き合いに対しては「会ってみるまでどんな人かと心配」で「はじめはメールもどうすればいいかわからなかった。内容はいいが、日本語が失礼じゃないか〔文法的には問題ないがその場に適切な表現かどうか〕と思った」り、「日本人の学生とは友達になりにくいとか、なってもどれくらい身近になれるか心配」で、「はじめはどんな話をしたらいいか、国が違うから考え方も違うし、こういう話したら失礼じゃないかとか、凄く考えて、迷って」、「日本人の友達と付き合うのは難しいなあという壁」があり、「相手が日本人だから緊張する」など活動に対して心配、不安、困難さ、緊張、消極的な気持ちが強くあったことが伺える。

図：大学入学直後の留学生在が支援制度のP活動で体験した自信獲得プロセス



入学式終了直後にはオリエンテーション・ガイダンスが開始し、慣れない環境のなかで、大学生活、講義概要についての膨大な情報を浴びるため、この時期の留学生の緊張度は非常に高まると考えられる。教務課や担当教員の手助けはあるが、必要なときすぐそばで手助けしてくれる先輩学生がいることはとにかく心強い。「大学に入った時はわからないこと

勉強のこと、単位のこと、学内の使いかたとかも全部パートナーにきいて凄く役に立った」、  
「最初、時間割自体の理解ができなかった、本〔講義概要〕の見方もわからなかった」、「必修以外の時間を有効に使うか、パートナーに教えてもらってとても助けになった」などこの時期の身近な具体的支援の必要性が高いことが伺える。

P活動に対しては、強制的で不自然な友人関係の始まりに違和感を持つ学生も多かったが、日本語上の難しさを強く感じている場合は「日本人と話すチャンスが少ない、パートナーと合うチャンスを作って必要だ」、あるいは性格的に積極的にできない学生は「はじめは紹介されて親しくなると話ができて、そうするとますます親しくなれるタイプなので、私のような学生にはとてもよかった」と言う学生もいた。

活動初期は互によく知らず、1対1で友達づきあいをすることにも不慣れのため互いに強い不安や心配を抱えているが、P活動を定期的に継続していくことで、次第に相互理解を深め友人関係を形成していく。留学生にとっては新しいことを聞ける先輩が身近にいることは、必要なときにすぐに現実的な支援が得られることは勿論だが、「大学に入ったばかりのとき、このようなパートナーがいれば落ち着ける」役割もあわせ持つといえる。パートナーとの継続的なかわりが、物理的な支援リソースという以上に精神的な安心感を提供してくれるリソースでもあることがわかる。その結果さらに関係が深まることが考えられることから、これを②**定期的なP活動が活動前の心配を払拭し、関係を深める**と概念化した。

P活動は昼休みを活用することが多いが、それ以外の時間を割いて具体的な手助けを受けることもあり「時間割作るのに夜レストランで食べながら」とか、「こんなレポート書くんだという、じゃ一緒に図書館に行こうよと誘ってくれる」ように、現実的で具体的なサポートを受けられることは、異文化状況では大変大きい意味を持つ。慣れ親しんだソーシャルサポートから切り離され、今まで自分が持っていた生活スキルが使えないことや役に立たないことで強い無力感を抱き、自尊感情を喪失する体験を強める（田中前掲、173頁）ことも考えられる。そんな時、すばやい、具体的な支援は支援の内容以上にストレートにこころに響くだろう。

すでに数年日本にいる留学生の場合は、以前の体験で日本人との間に壁を感じていたり、アルバイト先での不快な体験がきっかけで否定的なイメージを強くしている学生も多い。そんな学生が、P活動で初めて1対1でパートナーとの付き合いを通して、活動前は心配だった気持ちが「会ってみたら凄く付き合いやすい人」、「つきあってみたら国が違っても同じ友達だから、自分が本音で付き合ってみれば親しくなれるんだなあ」と実感したり、「パートナーとの活動がうまく進んだのにはびっくりしました」と感じている。「定期的に会いました。直接会ったほうが話も進みやすいし、メールではその約束をした」ように、活動条件のひとつであった定期的な活動は、友人関係形成のために役立ったといえる。関係が形成された学生の場合は、定期的にしかも各回の活動時間も長めであることがわかる（表2参照）。活発な活動に発展しなかった学生の場合、会った回数は前期約2ヶ月間で1回から5回以下にとどまっている。



#### 4. 3 カテゴリーⅡ；＜普通の友達への意識変化を支える過程＞

活動初期の履修計画作成のように、留学生のニーズに直結した支援がパートナーから得られ活動が動き出したとしても、そこに何らかの楽しさを感じられないとその後の活動継続への意欲や興味が湧かず、パートナーとの関係がより近づくことには繋がらないようである。「{いい性格なのだが} 同国人ならもっといい友達になれたのにと思う」と留学生が感じていた気持ちは、当然相手のパートナーにも伝わるはずであり、その気持ちは関係形成を妨げたと考えられる。また「入学直後お世話になったのはありがたい。授業が始まり互いに忙しくなり、相手を気遣って遠慮してあまり連絡しなくなった」という学生もいた。

活動が楽しくなると、それが積極的な姿勢を強化し活動で得られることに対して意識的になり、活動継続や関係形成にも努力する姿勢がみられたので、それを、**③会うのが楽しみに、前向きの気持ちが増える**と概念化した。「何回かあったら{次の約束が}はやく来ないかなと。(略)はじめはそう思わなかったんですが、何回かあっているうちに、やはり楽しかったり、期待する部分があったんです。とても会うのが楽しかった」と学生自身も、楽しくなった自分自身の気持ちを予想していなかったことが伺える。「義務で活動するものだったが、自分から積極的に活動しないと意味がなくなる(略)負担に思うより、ますます{会うように努力したら}会いたくなかったような気がします」という学生のように、留学生も自分で気持ちを切り替え努力した結果、パートナーに会うことが楽しくなると考えられる。

留学生にとっては、日本語母語話者と身近に付き合う中で日本語面は勿論、社会的スキル面でも学ぶことがたくさんある。「留学生同士だと日本人が何を言っているかわからないことでも、日本人と直接話し合ったら日本人の生活とかわかってくるし、留学生活が慣れやすくなったし、楽しくなってきた」という気持ちの変化は、活動参加への積極的な姿勢をさらに強化する。異文化環境下の対人関係において、特に適応の鍵になるのはホストとの関係だが、この関係性はゲストからのアプローチがなければ進展しづらく形成が難しいことも示されている(田中前掲、115頁、172頁)。定期的に会い、対話をしていくためには、留学生の努力と積極的な姿勢が必要となる。在日留学生対象の研究結果から、ホストとの接触程度が多い留学生は「日本人の外国人に対する態度」が肯定的と答える傾向がある(Takai1991、228頁)が、関係を形成する時間が増え、普通の友達として接する体験を実感していくうちに、今までなんとなく遠い存在であった日本人が身近に感じられるようになり、次第に自分自身もらくになれることを、**④パートナーとの普通の友達づきあいで自分の構えが少なくなり、素直な自分が出せるようになる**と概念化した。

「日本人と自然に話して、これが間違っただといわれたら、そうだ私のほうが間違っているかなと自然にわかるんです。日本人の友達という意識でなく、普通の友達という意識で話せるようになり、「いろんな会話を交わした中で、あ、こういう日本人もいるんだと印象を私に強くもたらした。私が失礼なこと言ってもそんなに怒らない、何でも受け入れて(略)他人にあまり言わないこと、互いに言うようになって、なんか、うちの人みたいな、友達みたいな関係があった。(略)日本人学生に対して自分をオープンにすることができた(略)差別しないで何でもはじめから素直に接触してみようという気持ち」になり、「学校のこととか、こんなこともあるんだよとあんまり遠慮しないで教えてくれたりするから、

ああ、友達なんだという感じがする。(略) レポート書くんだという、じゃ図書館に行こうよと誘ってくれるんです。(略) {あるレストランに} 行ってみたと聞いてくれて、知らないといったら、じゃ今度一緒に行こうよと。そんな友達がほしかった」という。しかもこのときに、P 学生が留学生の話をも否定せずに聴いてくれることも関係形成の上で大切な要素と考えられる。「自分の話もよく聴いてくれるし、(略)やさしくしてくれた、表情とか、積極的に聴いてくれる、話が進みやすいように聴いてくれる」。

このように述べた留学生と組んだパートナー学生は、過去に数回様々な支援活動に参加していた学生で、活動経験を重ねることでこのような聴き方を学んでくれた可能性もある。学びは教師が授けるのではなく学生の中から自ら起こるものであり、サポートはこの学びを補助する(三宅 2005、177 頁)といえる。しかし、パートナー学生だけでなく留学生にとっても、相手の話を聴くことはたやすいことではなく、これも教育的介入が可能な部分といえる。本学の留学生はほとんどがコミュニケーション学科に所属しており、相手の話を聴くことと同様に、相手の言うことをひとまず受けとめることも、また同様にコミュニケーション上の重要項目として、教育的介入により意識化を高められる可能性がある。

「あ、こういう日本人もいる」と感じ、同じ場所に立つ人間として相手に受け入れられたと実感し、「友達なんだ」と心から思える「そんな友達がほしかった」ことがわかる。支援活動では支援する人とされる人という関係ができやすい。事実パートナー学生の中にも、日本語や、生活面で困っているに違いない留学生の手助けをしたいと参加する学生も多く、活動初期には新入留学生にとって知らないことばかりなので、手助けしてもらえるのは大変嬉しく助けられるのは間違いない。しかし、いつまでもその役割で活動が続くと、留学生は子ども扱いされていると感じ、あるいは自尊感情を傷つけられ活動に参加する意欲を失うことも考えられる。

日本で生活するアジア人学生の多くは、アルバイトや住居探しなどで被差別体験をしていることも多く、明確な差別ほどではなくとも見下げられているという意識を持っていることも多い。「日本人は(略)アジアの国に対して差別があるんじゃないか(略)バイト先とかトラブルあると、うちの国見下ろしたからそういう風にやるんだ(略)そういう思いが強かった」という気持ちを抱いている学生は少なくない。それが P 活動で「普通の友達」として友人関係を形成する体験が、それまで持っていた日本に対する否定的なイメージを打ち砕いたり、日本や日本人に対する気持ちに大きな変化をもたらす。これを、一方通行でなく双方向で理解し、刺激し、学びあえる関係として、**⑤お互いさまにできることをする**と概念化した。「パートナーからいろいろ教えてもらったりしたから、お互いに困ったときやってくれる{互いにできる}のは嬉しい。友達になるために一番いいことじゃないかなと思う」。このような新たな学びや知的な刺激は相互関係の中で作用し、相互に啓発する。学生チューターと留学生の二者間の関係については、関係の深化に伴ってソーシャル・サポートの双方向性の授受が報告されている(田中 1997、85 頁)。「パートナーは本を読むのが大好きなので、本の内容とかを私に紹介して、自分はこう思うが、F さんはどう思うとか質問をたくさん考えてきます。多分前に話したとき国によって考え方が違うとか気づいて面白いなと思って、お互いの考え方に好奇心を持ったのだと思う。私が話すとパートナーは違う表現とか教えてくれて、面白かったです。{私も自分で読んだものについて} ここにはこう書い

であるけど私はそう思わないよとか話して、自然に話したくなりました」という学生は、毎回互いの空き時間を活用して、学期中 13 回も活動している。「こんな機会にこの人と出会った以上は私のことも教えてあげて、あなたのことも知ってほしいって {しりたい}。互いに知っていくときに親しくなれるから。自分のこと何も言わなくて大学の知らないこと聞くだけじゃなく、趣味とか自分の生活、あまり秘密のことではなくても話せることがある、それを言うと相手も心を開いてくれる。お互いに配慮してあげる」という双方向性のあるお互いさまの関係が、友人関係形成には必要といえる。

外語大の特色といえる、留学生の母語が受け入れ学生の専攻語という組み合わせの学生もいたが、それによるメリットは学生にはそれほど高く評価されなかった。中国東北部出身の留学生の中には、国籍は中国でも第一言語は朝鮮語という留学生も多いので、その場合は「中国語は弱いんです。パートナーが 3 年生だから凄く難しいことやっているから、いろいろ聞かれてもわからないことが多くて、あまり関係ないと思う。あまり重要な部分ではなかったが、二人で付き合うためのひとつのいい部分」であり、特に初期のころ共通の話題がないときは留学生の母語とパートナーの専攻語が共通だったので、話が「もりあがる」助けになったという。

#### 4. 4 カテゴリーⅢ；＜異文化適応促進＞

P 活動の時間経過に従い学生生活、日常生活面で積極的に人とかがかわれるように変化してくると、日本人とか外国人とか言う分類でなく、普通の友達という意識がさらに広がる。この過程を、⑥留学活全般に対してより積極性が増し、自信が湧き、心が開いてくると概念化した。活動前に感じていた不安、心配などはほとんどなくなり、必要に応じて新しいネットワークを広げ、ニーズに応じてより自由に行動できるようになる。日本人と身近に接することで、日本人が身につけているソーシャルスキルを学び、自分の生活に応用することができるようになってくる。「何の偏見とかそういうものもなく直接話しかけたりできるようになった。別のクラスの学生ともスムーズに付き合える、自分で積極的に話しかけたりできるようになった」と語る学生は、バイト先の先輩や他の人とも「親しくなった感じがして敬語を使わなくなったり、どんどん互いに冗談言い合ったりして親しくできるようになり、自分の心の中が、日本人に対して心が開いた」ことを感じている。同様にパートナーに教えてもらったことで「バイト先の日本人のかたとも上手にコミュニケーションとれるようになり、必要ないトラブルとか避けられるようになった」こともわかる。

これらは関係を通じて文化の学習が行われ、誤解やトラブルからはそれぞれの文化のもつ慣習への配慮も学んでいる（田中 1995、98 頁）ことといえる。また、それ以前はできなかったが、パートナー以外の日本人にも自分から話しかけられるようになり、日本語を間違えることが「恥ずかしくて笑われるんじゃないか」と心配だったことも、自分から教えてもらえるようになったという。パートナーとの経験により新しい友人とも「はやく」友達になれるし「自然に」話せるように変化した。パートナーとの経験が「なかったら、日本人の友達と普通に深くなれない」と思い、特別意識せずに「なんとなく日本人の友人も増え、楽しくなった」ことで「最初の扉がうまく開いた」と表現している学生もいる。また、前期は日本人学生に話しかけるのが「怖いなあ」と感じていた留学生は、後期は「自

分が友達になりたいと思ったら、話しかけて自己紹介して知り合いになって、どんどん友達になれる自信がもてるようになって変化したと思う」という。

## 5. まとめと支援制度への具体的提言

本研究の目的は、大学へ入学直後の新入留学生が新しい大学生活の環境のなかで、彼らに提供されている支援制度の1活動であるP活動体験を通して、パートナーとの友人関係形成により、自信を持って学生生活がスタートできるようになった留学生の体験過程を明らかにし、そこから得た知見を支援活動のより効果的な実施に役立てることである。本研究の対象となった2004年度新入留学生うち、パートナー学生と友人関係を形成する体験ができたと思われる留学生への面接を中心に、体験作文とアンケート用紙からの情報を対象にして、分析を行った。分析方法として変化の過程を分析するのに適しているといわれ、特に実務者がより研究しやすいように新たな提案がされている修正版M-GTAを用いた。

その結果、留学生は制度として与えられた支援活動で出会ったパートナー学生と、定期的に活動を継続していくあいだに、関係が友好的で深いものに変化し活動自体が楽しくなり、前向きな気持ちが増し、相手に対する構えが取れて素直に自分を出せるように変化した。相互に助けあい、学びあえるお互い様という気持ちが増えることで、次第に留学生活全般において自信を獲得し、自分らしく行動できるようになったプロセスが明らかになった。

この分析結果から、留学生の大学生活開始初期の支援活動には、定期的で継続的に顔をあわせて活動できることが可能になるような活動の工夫と、互いに会うのが楽しみになり、お互いさまという気持ちを持ち合い、関係が深化しより友好的な相互関係が構築できるような教育的介入を行うことの重要性と可能性が示唆された。対人関係が形成され相手文化の理解と吸収に伴い、対人行動の変容が起こりソーシャル・スキルが学習される(田中前掲)が、従来考えられていた友人関係は少しずつ進展しながら親密化するのではなく、将来深まるか否かは関係のきわめて初期にある程度決定するといわれる。ホストである日本人が初期の緊張感を受けいれ、個人ベースの会話を積極的に行う必要性(横田1991、95頁)を考えると、教育的介入の時期は関係形成の初期が鍵であり、P活動開始後1ヶ月以内の教育的介入の効果的な具体策を考えることが今後の重要な課題となる。本研究からの示唆を取り入れた実施新アウトラインを最後に提示したが、今後の実施に生かしながら改善していきたい。

さらに、外語大学の特徴である留学生の母語と同じ言語を専攻している学生を活用することに関しては、今回の調査結果からは留学生側にとっては、それほど大きなメリットはないという結果が示された。これについては今後パートナー学生の側の調査が必要となる。本研究の結果は、筆者が勤務する1大学の学部留学生支援活動のひとつであるP活動において、パートナーとの関係が形成できた留学生から得られたデータに限られたものである。全体的に見ると関係が形成しにくい学生たちのほうが多いという現状もあり、つながりを形成できない学生を対象とする分析は、今後新たな分析テーマを設定し継続していく必要がある。

表3： 日本語パートナー活動新アウトライン

目的	学部に入學した新留學生が、新しい大学生活に一日も早く慣れて、安心して学生生活をスタートできるようになるために、先輩受け入れ學生が身近なところで助言したり、対話しながら留學生と1対1で友人関係を形成することで新生活を応援する活動新入留學生がスムーズに大学生活をスタートするために、受け入れ學生が、先輩として友人としてサポートする
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 活動期間中は定期的に会い、対話を通して相互理解を深めながら、友人関係を形成する</li> <li>・ 活動場所は大学キャンパスを利用し、昼休み時間か互いに共通する空時間を利用する</li> <li>・ 基本的に1対1の活動だが、小グループで活動する場合もある</li> <li>・ 活動期間中2回ほど活動参加者全員が会える機会を設定する予定なので参加して交流範囲を広げる</li> <li>・ 2回程度のアンケートに協力する</li> </ul>
期間	前期；4月～7月(新入留學生全員対象) 後期；10月～1月(希望者対象)
日本語パートナーとして活動に参加する条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2-4年生。留學生と積極的な交流を希望し、希望した以上は熱意と責任を持ち週1回定期的に最後まで留學生と一緒に活動できる</li> <li>・ 活動初期(1ヶ月)の「効果的な活動のための勉強会」に参加できる</li> </ul>
募集方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ML、ポスター、説明会</li> </ul>
特に、活動初期に、心がけてほしいこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 互いに、よく話すこと、そしてしっかり聴くこと</li> <li>・ はじめは特に笑顔を忘れないこと</li> <li>・ 会う約束をしたらできる限り守ること</li> <li>・ 約束日時に都合で会えない場合は、必ず連絡をすること</li> <li>・ 教師ではないので教えようと頑張らないこと</li> <li>・ 相手や相手文化を理解してみようとおもうこと</li> <li>・ 自分のできることと、できないことを明確に相手に伝えること</li> <li>・ 相手に期待することは、まず自分で実践してみる</li> <li>・ 率直に考えや気持ちを相手に伝える努力をする</li> <li>・ 興味や関心を持って積極的にかかわる</li> <li>・ 相互理解が難しい、連絡がなかなかうまく取れない、相互の都合がうまく合わないなど、困難なことが生じた場合はまず相互に努力をしたり、互いの友人と裳相談してみる</li> <li>・ どうしても解決策が見いだせない場合は、いつでも担当者に連絡し、応援を求めること。一人で悩まないこと</li> </ul>
初期に話題がなくて困ってしまったとき役立つこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 好きな本、よく見るテレビ番組などについて話す</li> <li>・ 自分の日常生活、家族の話を紹介する。写真などがあると具体的にわかりやすい</li> <li>・ 活動の時間をどんな風に使いたいとお互いに意見を出す</li> <li>・ 自分が履修している授業について話す</li> </ul>
活動中困ることに遭遇したときは	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 他のP活動をしている友人に相談してみる</li> <li>・ 留學生担当者に連絡する</li> </ul>
他の留學生や他のP活動参加者と交流する機会(予定)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 4/29 新入生歓迎バーベキューパーティー</li> <li>・ 学部留學生日本語科目「日本語特別演習」(火) 1限ビジター参加</li> <li>・ 秋クリスマスパーティー&amp;忘年会</li> <li>・ 留學生会主催イベント参加</li> </ul>

## 参考文献

- 木下康仁 (1999) 『グラウンディド・セオリー・アプローチ—質的実証研究の再生—』弘文堂。
- 木下康仁 (2001) 「質的研究としてグラウンディド・セオリー・アプローチ」『コミュニティ心理学研究』5、46-69 頁。
- 木下康仁 (2003) 『グラウンディド・セオリー・アプローチの実践—質研究への誘い—』弘文堂。
- Glaser, B. & Strauss, A. L. (1967) *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*. Chicago: Aldine Publishing Company.
- Takai, J., (1991) "Host contact and cross-cultural adjustment of international students in Japan." 『大学論集』20、広島大学大学教育研究センター、195-228 頁。
- 高井次郎 (1994) 「日本人との交流と在日留学生の異文化適応」異文化会教育学会編『異文化間教育』8号、106-116 頁。
- 田中共子 (1995) 「日本人チューター学生の異文化接触体験：ソーシャルサポートとソーシャルスキル及び自己の成長を中心に」『広島大学留学生センター紀要』6、85-101 頁。
- 田中共子 (1997) 「日本人チューター学生の異文化接触体験(2)：その役割と異文化接触に関する質問紙調査」『広島大学留学生センター紀要』7、84-108 頁。
- 田中共子 (2000) 『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』ナカニシヤ出版。
- 坪井健 (1999) 「留学生と日本人学生の交流教育」異文化間教育学会編『異文化間教育』13号、60-74 頁。
- 水野治久 (2003) 『留学生の被援助志向性に関する心理学的研究』風間書房。
- 三宅和子 (2005) 「大学における「日本語」教育の総合的展開—自律的な個人を育てる人間教育を目指して—」『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ(2)日本留学試験が日本語教育に及ぼす影響に関する調査・研究—国内外の大学入学前日本語予備教育と大学日本語教育の連携のもとに—平成14年度～16年度科学研究費補助金基盤研究費(A)(1)研究成果報告書』研究代表者：門倉正美、170-178 頁。
- 村田雅之 (1999) 「インターフェースとしてのチューター」異文化間教育学会編『異文化間教育』13号、120-131 頁。
- 横田雅弘 (1991) 「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」異文化間教育学会編『異文化間教育』5号、81-97 頁。